報告ダイジェスト

・第47回渋谷区くみんの広場 ふるさと渋谷フェスティバル2024開催報告　（報告１）
・令和６年度初任者研修報告　（報告２）
・りばぁさいど原宿内覧会/レクロスマーケットに出店しています　（報告３・４）
・玉井所長のイタリア訪問記最終回　（報告５）

報告１　第47回渋谷区くみんの広場 ふるさと渋谷フェスティバル2024開催報告

昨年 11 月２日・３日の二日間、代々木公園にて「第47回渋谷区くみんの広場 ふるさと渋谷フェスティバル2024」が開催され、おかし屋ぱれっと・工房ぱれっと・ぱれっと親の会合同でブースを出店しました。渋谷区内の福祉事業所だけではなく、行政機関・町会・商店会・企業など様々な事業所が集まるこのイベントは、渋谷区最大のお祭りで、毎年多くの来場者で賑わいます。「毎年楽しみにしているのよ」「遠くからはるばる買いに来ました」「今年の“目玉商品”はどれ？」・・・などなどお客様との会話が楽しみなのはもちろん、同じエリアに出店する渋谷区内の福祉事業所との「大交流会」もあちこちで開かれ、楽しい時間を過ごしました。

●協賛いただいた企業様からメッセージ

『微力ではございましたが、弊社の製品をお役立ていただきましたこと、大変嬉しく思います。ありがとうございました。ますますのご発展をお祈り申し上げます。』

『お客様に大変喜ばれました、とのお言葉、大変嬉しく思います。商品、サービスを通じて、お客様に喜んでいただけますよう、今後も努めて参ります。』

『報告書からも大盛況だった様子が伝わってまいりました。弊社商品もみなさまに喜んでいただけたようで幸いです。今後とも、何卒よろしくお願い申し上げます。』

『お役に立てて嬉しく思います。来年も協力いたしますので、お声がけください。』

●親の会村上会長からメッセージ

初日は朝からあいにくの雨となり、テント内側に商品が濡れぬよう陳列しなければなりませんでした。そんな雨の中でもお祭りを楽しみに来てくださるお客様は傘を差しながら開店を待たれていました。途中小降りになりましたが、終わりに近づくころからまた雨が強く降りだすそんな雨の一日でした。２日目は前日の強い雨の吹き込みが心配でしたが、商品は濡れる事なく開店準備に取り掛れました。この日はお天気が回復しテントの外にも商品を置くことができ、おかし屋の通所員はクッキーを持って呼び込みもできました。お天気の影響で売り上げを心配しましたが、おかし屋のクッキーはほぼ完売し、バザーも売れ残る商品が少なく終わることができました。商品のご提供をいただきました皆様、ありがとうございました。

（ぱれっと親の会会長　村上春奈）

【大盛況！ブースの様子】

【協賛いただいた企業様】
（株）大塚商会
大和証券（株）
シマダヤ（株）
（株）ナイガイ
丸美屋食品工業（株）
キユーピー（株）
（順不同・敬称略）

ご協力ありがとうございました。次回もよろしくお願いいたします。

（事務局長　南山達郎）

報告２　令和６年度初任者研修報告

10月28日、29日に令和6年度　福祉職員キャリアパス対応生涯研修「初任者研修」に参加しました。この研修は、新卒入職後 3 年以内または他業界から福祉現場へ入職後 3 年以内の職員が受講対象で、ねらいとしては

①サービス提供者チームの一員としての基本を習得する

②福祉職員としてのキャリアパスの方向を示唆する

というものです。今回はzoomを使用しオンラインで講義やグループワークをメインに実施しました。

●参加型研修～グループワーク～

研修の初めにまず講師の方が仰っていたことがグループワークをするにあたって進んで発言をする事、人の話しによく耳を傾ける事、時間を意識するという事を大切にする点でした。この言葉を意識してグループワークに取り組みました。すでに取り組んでいた事前課題をもとにそれぞれの科目の個人ワークを取り組みそこからグループワークという流れで行ないました。5名1チームでそれぞれ司会、タイムキーパー、発表者を決め意見の交換と情報の共有もしました。保育施設、養護施設、障がい者施設など同じ福祉とはいえ他業種の方々と意見を交換し、新たな発見や気付きを確認することが出来ました。その中で自身の考えや気持ちをしっかりと伝えるうえで発想の転換や共有するべき価値観をお互い再認識することが出来ました。

●行動指針・福祉サービスの基本

個人的に大切だと感じたプログラムの1つに利用者さんに対しての向き合い方、大切にしていきたい事についてで、丁寧なサービスの提供や利用者さんの一人ひとりの特性を理解し臨機応変に対応することの重要性を改めて認識しました。その他にも利用者さんの背景・バックボーンに目を向けることで、さらに理解を深めより良いサービス提供が出来るという意見を聞き自分もサービス提供をする上で大切にしなくてはいけない点であり、より意識していこうと痛感しました。

そして、福祉の知識を学び専門性を身に着けていき基本的な挨拶、マナー、コミュニケーションを心がけたいです。

●価値観・キャリアデザイン

チームで大切にしたい価値観を共有することは自身のキャリアを形成していくイメージ材料となります。自分は、利用者さんやご家族の方、後見人さんに対してぱれっとホームに預けて安心するような場所とサービスを提供していきキャリアを積んでいきたいと思います。そのために挑戦目標とアクションプランの振り返りを月もしくは年で区切って考えていく事が大切だと感じました。

●感想

この2日間の研修はとても有意義な時間であったと感じます。研修で満足することなく今後、現場で活かせるよう日々努力していきます。

（ぱれっとホーム職員　三上天河）

報告３　地域生活支援拠点りばぁさいど原宿 OPEN!

渋谷区の地域生活支援拠点、面的整備の要となる「りばぁさいど原宿」がついにオープンしました。事業開始に先立ち、11 月 30 日には区内関係者への内覧会が開かれ、多くの方々が訪れました。若者の街、原宿にあって、ひときわ目立つ地上 5 階建てのモダンな建物には、生活介護、医療的ケア児の受入可能な短期入所、児童発達支援、機能訓練、放課後デイサービスに加え、25 メートルの温水プールや大きなバルコニーや庭園も完備されています。中でも私がすごいと思ったのが下の写真の「スヌーズレンルーム」。重度知的障がい者を対象とした感覚刺激空間で、光と音の刺激で安定をはかることができるそうです。となりの「はあとぴあ原宿」やその他の区内事業者も連携し、渋谷区の福祉がまたひとつバージョンアップします。（事務局長　南山達郎）

右：スヌーズレンルーム
中：車椅子のまま入れるプール
左：全景

※スヌーズレン・・・「くんくんにおいをかぐ」というスヌッフレンと「くつろぐ」というドースレンというふたつのオランダ語から来た造語。

報告４ レクロスマーケットに出店しています！

毎月第 1・第 3 水曜日 11:00～16:00 に渋谷区広尾の日本赤十字社総合福祉センター「レクロス広尾」のエントランスで「レクロスマーケット」を開催しています。渋谷青山通り商店会さんや、聖心女子大学ボランティアセンターさんと合同で、神奈川県の新鮮な野菜と一緒にクッキーやパウンドケーキを販売しています。職員の方や看護大学の学生さんをはじめ、病院や高齢者施設に来訪される方が立ち寄ってくださいます。また敷地内が公園のようになっているので散歩や買物で通る地元の方や、最近では開催しているのを知っていてわざわざ購入しに来てくれる方もいらっしゃいます。その中にはおかし屋ぱれっとを知っていて「ここに来れば買えるのね」と喜んでいる方もいらっしゃいました。販売時間は通常の販売会より長いですが皆が和気あいあいとしていて楽しい時間になっています。誰でも気軽に立寄れるのでお時間のある方はぜひ一度お越しください。　（おかし屋ぱれっと　山元絵里）

報告5　玉井所長の イタリア訪問記⑦最終回 ～Voci Erranti（ヴォーチ エッランティ）～

一昨年 11 月に訪れたイタリア視察の中から最後に紹介するのは、イタリア北部の町サヴィリアーノにて刑務所で服役中の囚人更生プログラムの一環として、劇団と彼らの働くカフェとクッキー工場の運営を行なう「Voci Erranti（ヴォーチ エッランティ（注[1]））」です。代表のグラツィアさんを訪ねました。

●刑務所演劇がさかんなイタリア

刑務所に劇団が慰問するのは日本でも聞きますが、イタリアでは囚人自らが役者として舞台に上がることが全国的に定着しています。その中でもグラツィアさんの劇団は、毎年 9 月に刑務所内で新作を上演すると 5 日間で 1000 人もの客を集める他、護衛なしで刑務所を出て出張公演まで認められている（外で悪さをしないと信頼されている）唯一の劇団です。

グラツィアさんは、過去に精神病院の患者たちと演劇を作った経験から、現在は囚人たちとワークショップを重ね演劇を作り上げています。「一回自分の人生を捨ててしまった人にとって自分のことを語ったり、表現したりすることは、大げさに言えば生死に関わるくらい大事なこと」だといいます。囚人は人と視線を合わせないように下を向いてばかりで、自分の尊厳も縮こまってしまっています。演劇では視線を扱う練習（真っすぐに人を見つめる）をします。また「相手の呼吸を感じる（聞く）」必要もあります。そうした経験を重ね、仲間と一つの舞台を作り上げることは、その人が生きる力を取り戻すためのケアにもなっていると言います。現に、出所後の再犯率は通常 60%を越えますが、Voci Erranti の劇団に参加した人では 6%に留まっているそうです。

●父親であり囚人でもある人とその家族のために

父親が服役中の子どもたちの多くは、自分が父親と会えない理由を知らされていません。父の存在を語ること自体をタブー化する母親へ怒りを覚えたり、会えないのは自分のせいだと責めてしまったりする子どもたちがいるそうです。また、父親たちも、どう自分の子どもと関わって良いのか分からずにいました。そんな状況を受け、グラツィアさんと多木陽介さん（注[2]）、心理学者や 13 人の囚人らが集まり、父親の境遇を理解するきっかけとなる絵本「おやすみなさいの森」が生まれました。この絵本を作るための集団カウンセリングの過程で、ある囚人は他の参加者に感化され、自分の子どもと何をしたいか想像することができるようになり涙を流したと言います。

●出所後の社会復帰を支える

出所後の生活が困難に満ちていることは想像に難くありません。社会の中に居場所や仕事を見つけられず、生活に困窮して再犯してしまう人もいます。服役中の人（刑務所外での訓練が認められている人）を対象に社会復帰に向けた就労訓練の一環で「caffè intervallo（カフェ インテルバッロ=幕間の意）」を始めました。現在は薬物使用歴がある人や精神疾患がある人も働いています。接客でのミスも少なくないそうですが、お客さんで文句を言う人はほとんどいません。また何も注文しなくても過ごせる居場所として、放課後に宿題をしにきている子どもの姿もありました。

ここで販売されている絶品のクッキーは刑務所内で囚人たちが焼いたものです。その評判が広がって大口注文が入り現在大忙しだそうです。演劇だけではなくクッキー製造にも携わるグラツィオさんは「演出家じゃなくて今はクッキーを焼くおばさんよ！」と笑っていました。彼女のユーモアと明るさ、母親のような温かさが多くの囚人の心を開かせ、彼らが尊厳を取り戻す道筋を作っているのだと感じました。

イタリア訪問記はこれにて完結となります。約１年に渡り連載にお付き合いいただきありがとうございました

（おかし屋ぱれっと・工房ぱれっと所長 玉井七恵）

おかし屋ぱれっとのクッキーを渡すと「仲間ね！」と感激してくれました

（注[1]）訳は「さまよえる声」。グラツィアさんが精神科病院で活動していた際、患者が閉鎖病棟から母親へあてた手紙（母親の元に届くことは無かった）のエピソードから名前を付けた。（注[2]）今回の視察をアテンドしてくださった演出家・批評家である多木さんに心より感謝を申し上げます。新刊が出ました⇒『プロジェッティスタの控えめな創造力：イタリアンデザインの静かな革命』